

大阪 ■ ■

No.33 2005. 8.27.

大阪哲学学校運営委員会 Copyright©, 2005

哲学学校

【郵便振替】01170-1-81313

【E-mail】contact@oisp.jp

【Home Page】http://oisp.jp/

【Net Forum】ホームページに掲示板を開設

【代表者】山本 晴義(校長)

【発行者】平等 文博(運営委員長)

【編集者】平等 文博

■ ■ 通信

「進化の隣人チンパンジー」

上野山 定由 (参加者)

バス停で、横長の椅子に腰かけてバスを待っていると、幼児を抱いた若いお母さんが来て、ちょっと離れた位置に腰かけた。幼児は立たせればよちよち歩きが出来そうな男の子である。

抱かれている幼児の顔の向きが、私が幼児の方を向いていたので、ちょうど真正面に向き合う格好になった。つぶらな透明感のある瞳である。その瞳で私の姿のあちこちを観察しているというよりは、私の眼を見つめている。私も、その視線に吸い寄せられるように、幼児の瞳を見入っていた。そのうち老人の私は瞳を凝らして見つめあうのに疲れてきたが、幼児の方は瞬きもしないで私の眼を見つめているので、私の方が先に視線を逸らすのは大人気ない。ここは我慢のしどころと見つめ合っていると、母親が二人の様子に気づいて笑い出し、抱いている向きを変えたので、見つめ合いの寸劇は終わりました。

その体験から、あの時のように幼児が傍らにくると、つい幼児の顔を見る、幼児の方も気づいて私の顔を見る、そして瞳と瞳の見つめあい

になるのだが、それでも直ぐに視線をそらすのと、時間の長短はあるにしても、暫くは見つめあうのと、二通りの子供がいる。

すぐに視線をそらす子供は、関心の対象が次から次へと移り変わるので、一つの対象を落ちていて観察するゆとりがない。従って印象は散漫だろうと思う。

視線を動かさず、じっと見つめている幼児の瞳は鋭い。だが私を見詰めているその瞳は、私の存在を認識しているのだろうか。認識してはいない。解説書などの説明によると、眼球の構造は、前方から順に、角膜、水晶体、硝子体、突き当たりには網膜の壁があって、その壁の向こうへ視束という両眼からの神経の束が伸びてゆき交差したりして紆余曲折のすえ、私の姿が、やっと意識するものにたどり着くのです。

ここで、ちょっとお断りしなければなりません。〈意識するもの〉と言うのは、脳のことです。脳、脳と再三出てきますと、妙な感じにならないかと思ひまして、〈意識するもの〉と言い換えました。御了承ください。

幼児の頭蓋骨で保護されている小さい意識するものが私という老人を観察しているのです。私の意識するものも、同様に視束によって送られてきた信号に基づいて外界を観察しているのです。しかし実感としては角膜から網膜あたりの眼球の機能によって外界が見えたり見えなくなったりするような、つまり眼を開ければ見え、閉じれば見えなくなる。わぎわぎ、意識するものまで信号を届けなくとも用が達せられれば、それで済むものと思うのだが、人間の身体、足の爪先から頭の天辺まで意識するものによって、支配されているのですから、感覚器官で感受されたものは、何はさて置きひとまず、意識するものへという仕組みになっているのでしょう。

幼いなりに体中に張り巡らされている神経からの情報を記憶し、それを整理する、例えば、送られてきた空腹感に対しては直ちに泣き叫んで食べ物を請求するというような対応策を指示しているのです。

従って偶然、バス停で出会った私の姿も、幼児の意識のどこかの片隅に暫くは記憶していて、再び出会うことがなければ、次から次へと押しよせる印象の下積みになって消えて行くことでしょう。

人間の幼児の意識については、ちょっと一休みしてチンパンジーの幼児の話に移ります。テレビで、京都大学霊長類研究所でのチンパンジーの生態研究を何回かに分けて放送していました。毎回最初の字幕に、「進化の隣人チンパンジー」とありました。研究員の方は、現代生存している動物のなかで、知能が人間に一番近いのはチンパンジーであると話しておられました。

また感情も豊か、研究員の方々によると、アフリカ現地での観察では、チンパンジーの子供が病気で死んだとき、母親はその死体を手放さず持ち歩き、ミイラになった我が子を、まだ生きていたかのように毛繕いをしてやっている。また母親がミイラになった我が子を引きずって

チンパンジーの仲間の所にきた時、かつての遊び友達であったチンパンジーの子供たちは死臭するにも関わらず子供のミイラと遊ぼうとする。

これらの事は、チンパンジーが死ということを理解する能力がないのか、それとも、わざと死を無視しようとしているのか、もしそうで在るならば、人間も死を無視しよう、抹殺しようとする苦勞しているのだから、確かにチンパンジーは人間にとって進化の隣人である。

テレビでは、アフリカ現地での野生の棲息状況と、愛知県犬山市にある京都大学霊長類研究所での、チンパンジーの生態比較研究の映像と解説がありました。

数多くのそれらの画面とその解説のなかで、特に印象が深かったのは2歳ぐらいから4歳ぐらいの若いチンパンジーの勉学態度です。勉学と言っても読み書き算盤ではありません。乳離れを始めた若いチンパンジーは自分で食べるものを探し出そうとします。その第一歩として、年長者たちが、何をどのように獲得し、食べているのか、その観察から始めます。

熱帯アフリカで生息しているチンパンジーの集団では、その長は雄で、雌は成長すると、自分を育ててくれた集団を離れて、別の集団に移り、受け入れてくれた集団の雄と交尾して、子供を育てます。

アフリカの現地で研究員が研究対象にしているあるチンパンジーの集団に、子連れ雌が来て受け入れてもらいました。その集団では、油椰子の実を石の台の上に乗せ、握るのに手ごろな大きさの石で、堅い殻を叩き割って、実を食べていました。母親に連れてこられた子供のチンパンジーは少し離れた位置で、その集団の大人たちの動作を観察していました。やがてどこからか、自分の体に合った台石と叩き石を調達してきて、油椰子の実を割り始めました。なかなか思うようには割れません。そこで、再び大人たちの割っている様子を、少し離れた位置からしばらく観察しては、また自分の持ち場

に帰って懸命に割っていました。

私が強く印象を受けたのは、あどけなさのある幼いチンパンジーが少し離れた位置で、立ち止まって、大人たちの木の実割りを注意深く観察している姿でした。

それと同じような姿を、犬山市の霊長類研究所でのテレビ画面で、再び見ました。この研究所では、チンパンジーを収容してある部屋はかなりゆったりとしていて、ガラスのような透明体を張り巡らし、研究員の方々が外から、チンパンジーの動作を観察できるようになっていました。

このガラス張りの部屋に、母親と子供との二組の親子が収容されていて、一組の親子は、母親はアイ、子供はアユム、と名付けられていて、母親の方はテレビ画面に映し出される幾種類かの数字と色の種類を判別できるので、世界的に有名な存在です。

もう一組の母と子にも名前は付けられていますが、似たような名前の羅列は煩わしいので、子供のアユムからみた視点で、隣のおばさんと、そのおばさんの子供で、アユムより5ヶ月遅れの遊び友達、という事で話を進めます。

透明なガラスの壁の外側から、チンパンジーの背丈よりは少し低い位置に8ミリほどの穴を開け、蜂蜜の入った小さな瓶、その瓶にも同じ大きさの穴をあけ、ガラスの壁の穴と、瓶の穴とが一致するように瓶をガラスの壁に外側から貼りつけ、チンパンジーのいる内側からストローを、その穴に差し込み瓶のなかの蜂蜜に届くようにしてあります。そして、ガラス張りの部屋の床には、色々な道具が散乱して置いてあり、到底8ミリの穴を通過できない大きさのブラシのような代物もありました。

ガラス張りの部屋に入ってきた母親のアイは馴れたものでした。直ぐに、使い慣れた道具を選び出しました、プラスチックの紐のようなもので、点々と小さな突起が付いているものを、穴に差し込んで、とりだし紐のまわりに付着

している蜂蜜を舐めていました。母親のアイは、プラスチックの紐に付着している蜂蜜を自分は舐めても子供のアユムには与えません。アユムは穴の周りに、こぼれた蜂蜜を舐めているだけでした。母親のアイは充分舐めて満足したのか、その場をはなれ部屋のすみで寝転んでしまいました。

アユムの挑戦が始まります。母親が使っていたプラスチックの紐の先端がガラスの8ミリの穴に容易には入りません。チンパンジーの手は樹木の枝を握るには、申し分のない形態をしていますが、紐を指先で摘みあげるのは至難の業です。苦心惨憺の末やっと紐の先端が穴を通過して瓶のなかに入りました。だがその先端が、瓶の底に溜まっている蜂蜜の方ではなく上に向いていて、いくら紐を繰り込んでも蜂蜜には届きません。仕方なく一旦抜き出して、再び差し込むと言うように、苦心惨憺の末、プラスチックの先端に付いている蜂蜜を舐めることが出来ました。

そこに至るまでのチンパンジーの子供の執念には感心させられました。それまでの間、どうしても蜂蜜を舐めることが出来ませんでした、作業を一時中止して、となりのおばさんが、細いゴムチューブの先端を穴に差し込み蜂蜜をつけて巧みに舐めているのを、少し離れた位置で、真剣な表情で観察していました。

動物の子供というのは、概していつも動きまわって居るものですが、この場合、大人たちの動作を、ある短い時間にせよ、立ち止まって観察していました。つまり、幼いチンパンジーの脳は、自分の身体に対して、大人たちが如何にして油椰子の実や蜂蜜を食べることが出来るのか、よく観察せよと指令を出しているのです。

更に、この二匹の子供のチンパンジーは、親たちの使っていた道具で蜂蜜を舐めることが出来るようになると、そこで立ち止まらずに、床に散乱している様々な道具を片っ端から手にとって蜂蜜に届くか、どうかを調べ始めました。

二匹の母親のチンパンジーは、子供たちの行動には無関心、アフリカの森で、大人のチンパンジー達が石を使って油椰子の実を割っていた場合にも、他所の集団から、母親に連れてこられた子供のチンパンジーは、大人達の行動を熱心に観察していました。現地に派遣された研究員の方の話では、母親のチンパンジーの方は子供と違って油椰子の実を食べることには無関心だったようです。

母親が試みようとしなかった理由は、母親が育った集団で習得した採取方法で事足りているのに、ことさら別の方法を見出す必要があるのだろうか、しかし、これは老化の始まりで、若いチンパンジー達は、好奇心旺盛に挑戦しているのではないのでしょうか。バス停で私と睨めっこをした幼児の様に。

研究所のある方が、チンパンジーが石で油椰子の実を割っている姿を見て、石器時代の先駆者だと笑って居られました。

人間とチンパンジーとの共通の祖先と思われる化石が、何百万年か、前のアフリカ、ヨーロッパ各地の古い地層から発見されているそうです。動物園で、チンパンジーの前に立って、私と見比べてみると外観は明らかに異質の存在であるが、体内を流れているものには共通のものがあるように感じられ、凡そ500万年間の時間の経過を意識させられ、奇妙な畏敬を感じました。

森から放れても牙と石器によって、どうにか生きていけるようになったチンパンジー、つまり、人間の先祖は、自分の運命をなんとか克服して生きてきました。

外界に適応するための身体の変化は、短時間のあいだに、その生き物の意志で変えられるものではないが、環境に対する適応性は時間の経過に従って微妙に無自覚に獲得されていくようです。

石器とならんで、もう一つ取り上げるべき事は、社会的動物と言われる人間の核心に関わる音声です。

テレビ画面で、研究所の方が、チンパンジーの言葉を紹介しようと言って、ご自身の唇を少し突き出して、「ウ」と「オ」との中間音を発音し、それを高く低く、そして、強く、弱くと、言うように、変化をつけて、わずかな時間、声を出して居られました。その音声に、出来る限りの変化を付けようと、しておられましたが、私には一種類の音声しか聞き取れませんでした。その音声は何を意味するのかの説明も、残念ながら時間の関係か、ありませんでした。

現在のチンパンジーが仲間との会話で、この音声で、どの程度の意思疎通ができていのか分かりませんが、私達人間は、自分の意志感情を相手に伝えようと、出来るだけ丁寧に話しても、理解してもらえないと、感じる時もあります。

あの単調な音声で何を伝達できたのでしょうか、チンパンジーの社会では、単純な音声と相手の行動、態度を観察していて、相手が何を望んでいるか、理解しあうような、手探りの社会ではないのでしょうか。

先祖のチンパンジーから受け継いだが、捨てたものも多くありますが、中でも特筆すべきはあの大きな顎と牙です。しかし、人間が捨てたものではありません。人間がしたことは、石器の改良です。一撃で獐猛な獲物を倒せるような石器を作った事です。大きな顎も牙も使わなくても獲物は手にいれる事ができるようになった。使わない道具は錆びてくるものです。何万年と万単位の時間が経過している間に牙も大きな顎も、次第に嬌小な歯と顎に変化してしまっただ。顎が嬌小になるに従って顎とその周辺の動きも滑らかに、軽快になって、出てくる音声の種類も殖えてきて、仲間内のやり取りも僅かにせよある程度は対話できるようになりました。

現在皆様方が鏡で口の中をご覧になれば一目瞭然、上と下に馬蹄形に並んでいる歯、多くの神経が舌の内部に届いていますので、味覚を味わうと、共に上下左右と敏捷に動いています。この状態が、500万年前、チンパンジーと人

間との共通の先祖であった獣の顎と牙との、現在の姿です。

ご存知のように、英和辞典、お終いの所で、「発音解説」があります。そこには、音によって唇の開き方、舌の位置とかを図解して、丁寧に解説してあります。英語だけでも、音声の種類は多いのですが、朝鮮語、中国語と世界中の言語のなかで、共通の音声と特殊な音声とを取り上げると随分の数になると思います。

音声は人間の意志、感情を表現しています。もし人間が音声を獲得していなかったら、意思、

感情は脳のなかに閉じ込められたままです。自己表現は不可能ですし、他人の意志感情に触れることも出来ません。もし、あの石器時代の間言語が現在の状態に近づいていなければ、この人間社会は随分と索漠とした暗い状況になっていたかも知れません。

地球の過去から見れば、ほんの一瞬、人間の生涯から見れば永遠とも受け取れる、あの石器時代が人間の意識と、それを表現する言葉の摇篮時代だったようです。

大阪哲学学校活動日誌 (「通信」32号発行以降)

- 2005 4.30.「大阪哲学学校通信」第32号発行
4.30.『心のノート』は子どもたちに何を教えようとしているのか
.....報告・中村 徹、宮前泰雄、平等文博
5.14. 〈知の歴史〉入門講座・第2シリーズ
「19世紀ドイツ哲学が現代に訴えるもの—カントからヘーゲルまで」(1)
「カントから、何を学びとるか」.....講師・西川富雄
5.28. 〈知の歴史〉入門講座・第2シリーズ
「19世紀ドイツ哲学が現代に訴えるもの—カントからヘーゲルまで」(2)
「フィヒテのどこに、私は惹かれるか」.....講師・西川富雄
6.11. 〈知の歴史〉入門講座・第2シリーズ
「19世紀ドイツ哲学が現代に訴えるもの—カントからヘーゲルまで」(3)
「シェリング哲学の何を、私は論じてきたか」.....講師・西川富雄
6.25. 〈知の歴史〉入門講座・第2シリーズ
「19世紀ドイツ哲学が現代に訴えるもの—カントからヘーゲルまで」(4)
「ヘーゲルは、シェリングを超えることができたであろうか」講師・西川富雄
7. 9.「郵政民営化への大なる疑問—労働現場からの報告」.....講師・野崎正輝
7.23.「九条の心とわたしの戦後」.....講師・鈴木 正

運動誌・研究誌

◆哲学学校の会員や参加者の中には、それぞれの関心からさまざまな市民運動や研究会に参加・運営をしておられる方がいます。そうした方々が、お書きになった文章や活動紹介を兼ねて出版物などを送ってくださいます。最近はそのようなものをいただきました。会員交流の一助としてご紹介いたします。(※各連絡先を知りたい方は哲学学校事務局までお問い合わせ下さい)

●『ニュース・アソシエティブ』第228号(2005.8.10)、経済研究会発行

「日本の改革 総選挙で日本の政治に転換点を作るべき」「イギリスにおけるテロ」ほか

●『季報・唯物論研究』第92号、『季報唯研』刊行会発行

特集「21世紀のマルクス」、小特集「田畑稔『マルクスと哲学』をめぐる」

宇仁宏幸、松田博、田畑稔、高根英博、室伏志畔、やすいゆたか、ほか執筆

上田閑照「私とは何か」を聴講して

松尾 猛省（会員）

大阪経大の北浜キャンパスが五月より開設され、その第一回目が5月にあり、聴講した。徳永光俊氏(塾長)の司会にはじまり、やがてパソコンより正面の幕に『十牛図』が映し出される。「私とは何か」上田閑照著、岩波文庫は以前読んでいたが、直に著者の話が聴ける光栄に浴した。上田氏の話はその前に「十牛図」(下)をまず解説しながらの話となった。

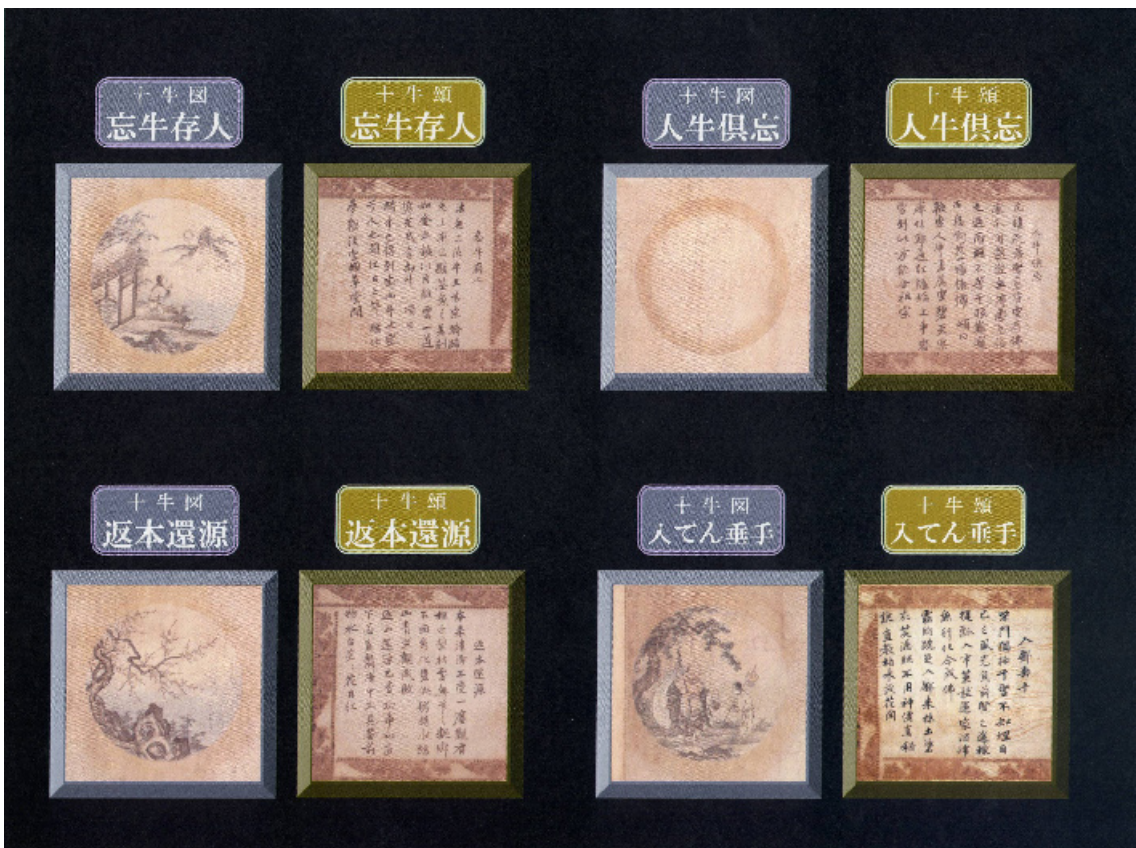
端的には、人間はそのままではおかしくなるらしい。つまり非人間的になる。人間が本当の人間になる、本当の人間とはどういうことなのか。非人間的とはつまり人間がすることは思えない行為を平気でやってしまう場合もある。

また巷にはそういう記事で満たされることがしばしばあることはよく見受ける。

人間の迷い、わからないから迷う。何か自分はおかしい、普段の自分ではない。誰しも、一度や二度、しばしばあることである。

一図は「尋牛」つまり牛を尋ねる。牛がないので牛を探す図である。人間にたとえると本来の自分がない。本当の自分探しが始まるとも言おうか。

二図は「見跡」つまり足跡をみる。それは言葉でもつてしか、真の人間を理解するしかない。無我、心身一如、万物同根、つまり「天地と我と同根、万物と我と一体」等々。



三図は「見牛」牛の声を聞いて後姿を見る。しかし牛のすべてを見たわけではない。

四図は「得牛」遂に牛を見つけて手綱をつけるが、嫌がる牛をひきつけようとする状態。緊張、捕まえたぞ、もう離さない。本当のあり方、その努力は欠かせない。

五図は「牧牛」牛を飼いならす。自分のものにしていく段階で大切な課程。

六図は「騎牛帰家」周囲との調和、調べ、自分と自分が和む。囲いと調和。自分と一体になる。それは場所においてある。

七図は「忘牛存人」家に帰り着いた。ほんとの自分の家かどうか分からない。牛が消える。長い間の修業。天狗禅、人間が人間になる。本当の人間になる。—自覚

八図は「人件俱忘」牛も人も忘れ去られる。迷いも悟りも超越した時→空、虚空。

九図は「返本還元」童子が対面しているのは、悟りを得た老人たちである。これが私たちがだ。

十図は「入てん垂手」てんとは市場のことで、そこへ垂手していかにも気ままにはいってくる。街に入って手を垂れる。なんでもないことに気がつかない。我と汝、—ともにある。おじぎする。—頭を下げる。—礼儀以上のこと。我を追う→無にする。我を祈る。時候の挨拶、自然の中にある。確認して無から立ち上がる。

廓庵禅師の『十牛図』の説明、解説は以上のようにであった。

これらから我々は何を理解しつかんだのだろうか。

十牛図は牛を探すところから始まってはいるが、人間が人間を探すに置き換えてみて、そこからの過程を振り返るのも意義があるように思えた。

さて、いよいよ上田閑照著の「私とは何か」の本題にはいりたいと思う。といってもなにも私がこの難解なテーマについてすべてを理解したのではなく、読みほぐしながらみなさんと一緒

に考えてみたいと思うのです。

「私とは何か？」

「私」とは「私は私である」であるということであり、「私は私である」ということである。

「私」とは誰か。「私は私である」という当の「私自身」にほかならない。といえばそうかもしれない。私たちは日々「私」「私」と自明のこのようにいい続けているのに、どうして今更「私とは何か」というようなことがあらためて問われるのか、何を問い、誰が誰に問うのだろう。

本書の冒頭の言葉である。たしかに誰が誰に問うのか、そう問はれれば一瞬いきづまることもある。何のためにという問いかけもでてこよう。たしかに、日に何度私たちは私とはいいい続けていることだろう。「私はコーヒーにする」「私はビールにする」とか。その時、私も聴く人も話したときに直ぐにその意味を理解する。それはいい悪いの意味でなく人間としての基礎的な事柄であるといえ、誰しも理解するであろう。

しかし、私をめぐる関連をみると「私用」とか「私事」の言い方、さらに「私秘性」、そこには他者が入ることすらできず、当人にとっても、不透明な奥深いところを示唆している。

仏教は「我」を「私」という。すなわち、我をの仮装とみる。「我は我(が)なりが仏教の洞察。これらの用例が示すように私という事態には、既に法的、倫理的、さらに宗教的な次元にまで含まれるという見方である。

さらに、「私」「我」にはなにか根本的に不安定性があると。「私は私である」ところの固有なこととして、自同性(自己同一性)、自覚、自由があげられるが、この三者はそれぞれに不安定、自同性にはアイデンティの喪失ないしは自閉、自覚には無自覚、自由には不自由ということがあり、現実的には後者の否定的な変容態になってしまっている。

なるほど、そういう見方からすれば、私というあり方には「私でなくなる」可能性がはじめからあるということだ。したがって「真の私」という問題も提起される。それが、自分探しでなく、「私という」ときの本当の「あり方」を探求し、実現しようとする。一図の「尋牛」がまさにそれに当たるといえることであろう。

ここで注目すべきことは、私というあり方に異なった質を表す二種類の言葉である。

即ち、自意識と自覚、自尊心と自敬、自殺と自死、自慰と自適などである。自意識は閉じられた自己意識、それに対し自覚は開かれた自己意識、自尊心は他者に対して、あるいは、人々の間で我を高しとするのに対して、自敬は自己を開いて、その開かれたところで触れることのできるより高いものから自己を受け取って慎むこと。さらに根本的な言葉として自我と自己がある。

また「私」といわないことによって真に「私」である場合もあるであろう。「私」とはほとんどの場合先ず歪み、おかしくなり、狂って――「私」とは先ず「私」という病であるといえるほどに――そしてそれが直されて私になる。そのような全運動にほかならないのではないか。

これはいったいどういうことなのだろう。「私」といわないことによって真に私であるとはどのような場面であろう。それは、謙讓の場合であろうか。あるいは自己を無にして他に尽くすことなのだろうか。さまざまなことが想定される。

つぎに、気になるのが、私という場合、殆どの場合先ず歪み、おかしくなり、狂って――それが直されて私になる。

私がおかしくなるのは、私が置かれているさまざまな環境的条件があるからである。

人間がおかしくなるのは人間を司る心が正常でなく、異変が起きる場合であろう。謂わば心の病に陥った時、歪み、おかしくなり、それが

昂じれば狂気の世界に陥る。

何によってもたらされるかといえば様々な環境的条件によってといえば、まさしく、他者との摩擦、欲求不満、人間関係の軋轢など様々が考えられる。

著者は「私」が「私」であるところの窮地に陥らざるをえないのであろうかと。まさしく、心の病に陥ったものは、それを自身で直すのは容易でないことは、経験者の見るところである。

「私とは何か」を問いかけ、「我は我なり」という我の声、一方、無我と言われ「則天去私」あるいは、我があるのでなく、翻って「我と汝」とも、あるいは、「人は人吾は吾」また、「吾もまた如是、汝もまた如是」さらに「私は汝、汝は私」といわれたりもする。

そうかとおもうと、「駄目な私」「どうしょうもない私が歩いている」とも、「あいまいな日本の私」それから遠く、「我思う。故に、我存在す」の声も聞こえる。

私たちは、「私とは何か」を問い続けるうちに、様々な答えのあることを見た。

「則天去私」とは漱石のたどりついた、天にのっとり、私を去るであるが、人間の辿り着く究極の境地かも知れない。

一方、人は人、我は我といいながらも、「私は汝、汝は私」はまた、自我を超えて人間の辿り着く最高の境地でもあるのか。ことに、男女の相関関係においてその境地を見る場合もあるのか。たどりつけば理想の境地といえるであろう。

「私とは何か」そもそも「私」というのはどういうことなのか。をいろいろと見てきた。

この人間主体が自分を「私」というとき、何がどのように起きているのか。また私という個々の人間はどのような存在か。エゴ(我)といえるのは神のみであるとする神学思想、また仏教は無我を説く。

私たちが私というときの日常的な基礎的事態をみると、私というその自分を同じ場所に居るその都度の相手に向けること、即ち、相手と向かい合って、他者である相手を受け入れつつ、相手に対し独自に私といえるこの自分として存在すること。この全関連が基礎的事態とみなされる。だがその関係はスムーズに行かず、難しいのが経験の示すところ、私というとき、私が出すぎるあり方も、逆にはっきりしないあり方も、本当の私でないあり方も感じるところである。

私ということは、自分を指して他者に向く行為、それは「自分に返る」方向と、その自分を他者である相手に向ける「自分から出る」方向、このふたつの逆方向への運動(求心性と遠心性)からなる行為。

自分に返る方向には「私は私である」は「私」へと引寄せられ自閉しようという動きがこもっており、したがって「私」といいつつ相手に向ける方向の翻りは、「私」へと自閉しようとする動きを否定して(私ならずと自分を否定)自分から出る脱自方向を取り、自他がともにある場所に開かれなければならない。その全運動の要は「私ならず」という否定によって生起す

る方向の翻りにある。

以上私の基本的なあり方の否定性をはっきり表し、「私は私ならずして私である」ということを見た。これが「私とは何か」という問に対する第一の答えである。が、それで終わりというものでなく、さまざまに起きる問題をみていかねばならない。

人間存在の根本構造。人間存在には«どこで»ということが本質的にかかわる。人間はその基礎構造に於いて場所的存在(西田幾多郎)であり、世界内存在(ハイデッガー)として規定される。

人間が人間として住むところが、究極的にどのような場所かが決定的に問題となる。他者と私と共にある、場所が私を構成する一つの基本的契機であり、この場所が「世界」になっていく。その都度具体的な場所、限定された特定の意味空間さまざまである。最終的には包括的意味空間、即ち世界にまとめられる。

「私とは何か」を整理して、問う内にその前提として「私ならざる私」をみて、それが場所的な関わりを見た。次回には「私とは何か」その私の実存的な面を見たいと思う。

【お詫びと訂正】

本通信第32号に掲載した松尾猛省「怪奇なる事件『文壇照魔鏡』—与謝野鉄幹に思う」について、講師の木村勲さんより以下のような誤りのご指摘をいただきました。筆者の松尾さんにも確認しましたが、木村さんのご指摘の通りですので、お詫びとともに訂正させていただきます。

①[4頁の右段7行目]鉄幹が提訴したのは4月15日刊の雑誌「新声」掲載、高須筆の「文壇照魔鏡を読みて江湖の諸君に憩ふ」についてです。この雑誌への言及がないため、文脈状、同「誌」は『文壇照魔鏡』(3月10日刊)そのものとなります。これは重大な間違いです。その結果、「直後の告訴」(つまり沈黙はしていなかったことになる)と10行下の「鉄幹の沈黙」との矛盾も生んでいます。

②[同12~13行目]高須、中根は勝訴したのだから謝罪文など出しません。ここの謝罪文とは、鉄幹が提訴した際、こういう詫び状を出せと添えたサンプルです。

③[5頁の左段12行目]「みだれ髪」はその年8月15日刊、つまり5カ月後です。「木村のレジメによる」[4頁の左段4行目]という前提がかけられているので、率直の所、不正確な引用は迷惑といわざるを得ません。

【書評】

『海なお深く—太平洋戦争 船員の体験手記』

木村 倫幸 (参与)

「広大な西太平洋海域に戦線の広がった太平洋戦争の本質は海上補給戦であった。／大量の軍隊を送り込んで東南アジア地域を占領し、その資源をもって国力を補充しながら戦争を遂行しようという戦略を支える根幹はすべて海上輸送態勢に依存していた。／(中略)／しかし、実際に輸送を遂行する中で、軍部のとった海上輸送に関する対応は、この時期における世界の海洋国家の近代的な輸送戦への戦略常識とは著しくかけ離れたものであり、それが結果して本書に記録されたような『輸送船の悲劇』を生む母体となったのである」(本書解説)。

このように本書は、「第二次大戦への参加を余儀なくされた(いま風にいえば『業務従事命令に従った』)船員の体験手記である」(復刻版あとがき)。

もともと本書は、産別労組、全日本海員組合の創立40周年事業のひとつとして1986年に編まれた(発売・新人物往来社)。そして20年後の今、再び海員組合と日本海員福祉センターの記念事業として本書が復刊されることになった。これが海の平和を願い、船員受難の姿を伝える本書の背景となっている。

太平洋戦争において日本の商船隊(百総トン以上)は、2568隻、843万総トン余、保有船腹の88%を海底に沈められ、船員は総数6万人余が戦死したとされる。しかしこの事実は、戦闘艦艇による激烈な海戦の陰に隠れてしまっておりあまり知られていないのが実情である。

それにしても就航船の88%が撃沈させられるという事態がどうして生じたのか。本書解説は次の3点を指摘する。「全般的な戦時輸送態勢への見通しを決定的に誤っていたこと」、「近代戦

では常識とされた海上交通破壊戦略への認識を著しく欠いていたこと」——すなわち極端な戦闘主体・補給従属思想が軍部の戦時輸送に対する考え方であった、「軍部の傲慢な特権意識による商船軽視の思想が支配的であったこと」である。

このような状況からもたらされた結果を受け止めて、本書は、「戦時中に船員が、軍事主義下での非人間的、消耗品なみの扱いを受けた屈辱は忘れることはできない。こんな暗黒時代は二度とあってはならない」(序)と主張する。

本書の構成は、1941年(昭16)の開戦時より戦後の遺族の手記まで経年的にまとめられている。「第1章 緒戦の海」「第2章 制海権なき帝国シーレーン」「第3章 戦火の海の標的となって」「第4章 特攻船団の壊滅」「第5章 受難の傷あと」「第6章 残された者の戦記」と続くが、戦争が長期化するにつれ、制空権も制海権も失われて、護衛艦すら満足にない状態で、丸腰同様の輸送船団が次々と沈没していく姿が痛々しい。その実態を本書で読んでいただきたい。

このような中で追い詰められた船員たちのさまざまな声が聞こえてくる。

「船員は軍属とされていたが、実態は船員たち自身が『軍犬、軍馬、軍鳩、その下に船員』と自嘲したほど、まるで軍人の召使いか戦争の道具のように扱われた話は枚挙にいとまがない」(解説)。

「皆お互いに黙して語らなかったが、身に寸鉄もおびずに敵中を往来する、やられっ放しの船員と、及ばずといえども一矢むくいる弓矢を持った軍人との差は、まさに雲泥のそれであった」(第

5章)。

「正直いって輸送船船員としては死にたくはなかった。『どうせ死ぬのなら、俺も海軍艦艇に乗って鉄砲の一発も撃った上で名誉の戦死とやらにしてもらいたいものだ』と何度思ったことだろう」(第2章)。

「第二次大戦では、海上輸送に従事した商船の、いわゆる武器なき戦いの中で多くの船員が死亡したが、これらの人々が靖国に祀られたとも、勲章を授けられたとも聞かない。観音崎に建てられた顕彰碑が、その唯一のものではなかるうか」(第1章)等々。

これらの思いについては、軍人とは異なる視点からさまざまな評価が可能であろう。最後の文は、現在議論の渦中にある靖国神社の性格の一面を言い当てている。

また1942年(昭17)後半より、大型商船の撃沈が増加するにつれて、その不足を補うために多数の漁船・機帆船が徴用された。船足が遅く、何の武器も持たないこれらの船が多量の被害を受けたことは言を待たない(第5章)。しかし本書ではそのごく一端が見えたに過ぎず、33万9千総トン程度とされている戦時喪失機帆船(平均百総トンとして約3400隻が沈没したことになる)の実態は依然として不明のままである。

このように戦時下の船員の状況は、危険極まりない上に悲惨なものであったにもかかわらず、

その活動の全貌は、戦後60年の今日まだ見えていない。そして本書に寄せられた手記の幾百倍もの人々が、声をあげることのできぬままに死んでいったという事実を忘れることはできない。シーレーン問題が論議され、あるいは有事立法によって民間施設等の軍事的使用が探られている現在、過去に直接戦争に関わらざるを得なかった船員たちの経験を伝えていくことは、ひときわ大きな意味を持つようになってきている。本書がこのことを考えていく大きな手がかりとなると確信している。本書の解説は、最後にこう語る。

「敗戦の後に多くの戦史や戦記の類が著され後世に残されてゆく中で、輸送船の記録はきわめて少なく、稀にあっても、それは『戦力』としての側面からの歴史であり、数字であることが多かった。/(中略)/私たちの海の先輩たちが生きた戦時下の海がそうであったと同じように、歴史までもが強者の論理に覆いつくされてしまっていていいはずがない。商船船腹量の88%を壊滅的に失い、商船船員の推定死亡率が陸海軍軍人のその1.4倍もの高率であったという史実は、明確に歴史の中にとどめて世に伝えるべきことであるはずだ」。

『海なお深く——太平洋戦争 船員の体験手記』(全日本海員組合編、2004.8.15.発行、中央公論事業出版)

イブライム・フェレルさんの逝去によせて 中村りょう子

あの、「苔」に触ってみた時のような、懐かしい(?)土に近い、自然のままに耳から、体へ、まんべんなく、通りぬけ、ゆく、風に似たイブライムさんの声。その声を忘れておりません。

不覚の涙とともに、今朝、「ララララ〜〜らあ」で始まるメロディを口ずさみ、悼みます。

「靴みがき」も「カーネギーホール」も、自宅での「祈り」も彼には、同じだったんじゃないかなって、私には思えて、それが素敵なお伊ブライムさんです。(2005年8月8日)



※イブライム・フェレルさんが6日、ハバナで死去した。78歳だった。フェレルさんは1927年2月20日、サンティアゴ・デ・クーバに生まれ、1941年にプロの歌手としてデビュー。キューバのナット・キング・コールとも言われた。1997年にアルバム「ブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブ」より、国際的な名声を獲得する。1999年に同名の映画が公開された。

井真成墓誌問題の歴史喪失

室伏 志畔（講師）

昨年、中国の西北大学歴史博物館が発表した唐代の日本人・井真成の墓誌についての里帰り運動は、目をみはるものがある。すでに墓誌は五月十二日に朝日新聞や日中友好協会のはからいで日本に戻り、現在、愛知地球博で展示され、これから東京国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館を経て、年末には藤井寺市への着地が模索されているかに見える。

何故、藤井寺市なのか。それはこそって識者が井姓を中国姓一字名称とし、東野治之は「葛井」説を、鈴木靖民は「井上」説を、そして藤田友治は「白猪」説へと進めたが、「河内国志紀郡」（大阪府藤井寺市）の渡来人とする点で一致したことにある。そこで藤井寺市では「井真成市民研究会」が組織され、署名を集め中国に渡り、その墓誌の「里帰り」を要望した。これを受けて各地の大学や研究会は井真成を遣唐使とする立場から日中友好を兼ねて中国の学者を招いてシンポジウムがもち、朝日新聞を中心とするマスコミは、これを全面的に支援する報道をとっている。それは靖国神社問題でぎくしゃくする日中友好を、民間交流からカバーする一面をもっている。

私は多くの市民が歴史に関心をもち、日中友好を進めることを大いに意義あることと思っているが、それは深く「歴史に学ぶ」ものでなければならない。しかし、あれよあれよのここに至る墓誌問題の進展は、日中友好と里帰りという市場価値に沿っての進展であっても、学問的には井姓を中国姓一字名称とし、それを和姓として考慮するものではなかった。私はこの偏重した流れを平衡を欠くものと考え、和姓の立場から一言したい。

1. 墓誌と井真成の読み

しかし、その前に墓誌について少し触れておきたい。それは蓋に3字4行で12字、底に16字12行にわたり171字が図のように彫り込まれているが、9つの欠字をもつ。

その大意は、「姓は井で字は真成、国号は日本である。彼は才能があり、遠い国から唐に来たって、礼儀正しく、勉学に励んだが、734年の1月に36歳の若さで亡くなった。皇帝をそれを哀れみ「尚衣奉御」の位を贈った。2月4日に葬儀が行われた。参列者は悲しんだ。遺骨は異土に埋められるが、魂は故郷に帰るだろう」とある。

この墓誌が目されたのは、姓名の表示があり、日本の表記としては金石文としては最も古い用例であったこと、また彼が遣唐使として中国に渡り皇帝から無類の信用をかけられ、死しても魂は故郷に帰ると望郷の念が強く訴えていたことにあった。この望郷の想いを多くの人が汲み、里帰り運動が生まれる背景となった。

井真成は中国姓とする立場から、「せいしんせい」、「いのまなり」、「せいまなり」の読みが横行しているが、音読みはともかく、和読みとと和中折衷読みはどうかと思う。では和姓とする立場からそれはどう読むべきであろうか。和姓としての「井」の読みは姓氏辞典を引くと「い」、「いい」、「いず」、「いずつ」、「いのもと」がある。角川書店の『姓氏家系大辞典』によれば、その中で「いい」の読みが最も多く見える。そして井伊、伊井、飯井、井居、猪井の姓が「井」から派生したことが解る。それでは「真成」は「まなり」でいいのか。私は兼川晋の「まさなり」の読みが和姓にふさわしく思う。そこで私は「い

いまさなり」を読みとして推奨したく思う。

2. メールと産山村探訪

和姓に井真成を奪回することは、それにまつわる共同幻想に参内することである。中国姓とする立場は、のっけから日本の古い共同幻想に入る事を拒否するもので、それは日本史研究として深まらない。私はたまたま近藤姓から井姓に名を変えた卒業生が対馬にいることを知ってはいたため、現在の流れに入る事を免れたが、それ以上の手がかりをもたなかった。そんなとき政治学者の捧堅二からこんなメールが舞い込んだ。

今日『新婚さんいらっしゃい』で
熊本県の産山村の「井」という人が出てました。
同村では「井」という人が600件。

例の「井真成』に関するものかもしれませんね。

奥さんの旧姓が「ものべ」だそうで、
ひょっとすると「物部」かもしれません。

私は弾かれたように立ち上がった。それは産山村の地がかつての熊襲の本貫に近いことに関わる。というのは、私は近時、宮中にかつて熊襲の神が祀られていることを知り驚愕したことにあった。というのは現在、宮中三神は天照大神ほか二神とされているが、その天照大神を祀る皇室の不倶戴天の敵こそ熊襲で、それがかつて宮中にあったことは、皇統の転換を語るものであったからである。それを発見した白名一雄は、『越境としての古代3号』（同時代社）の中で、宮中三神を大国主(大己貴命)と少彦名命の韓神二坐と園神一坐である大物主命と解き証した。それは現在の天照大神以前のこの列島の大神(主神)の発見に止まらず、この列島の王朝交替論に道を開く画期の発見なのだ。しかしこの中で園神の意味が不明であった。しかし共時性と云うものは恐ろしいもので、福永晋三が主宰する「神功皇后紀を読む会」で、『続日本紀』に

頻出する「曾の国」のメモを取った高見大地が、そこから「襲の国」を疑い、福永晋三に電話して二人の結論はそこに落ち着いた。

「園神」は「襲の神」となったが、そこに留まらないのは、「襲の神」とは熊襲の神にほかならないことによる。その「襲の神」を祭祀する熊本県の産山村に、メールは井姓が盤踞するというのだ。私が弾かれたように立ち上がった理由である。

その産山村が熊本県の東北端にあり、それが一の宮町に隣接することをインターネットで確認し、さらに私は戦慄した。一の宮とは古代のその土地で最も尊崇篤かった神社を指すが、熊本県の一の宮とはほかでもない「襲の神」を祭祀する阿蘇神社にほかならない。しかもその産山村のホームページで、村長が井道行であることを見出した。

5月18日、私は「九州」古代史の会」のからいで、兼川晋を始めとする一行4人に、夜行バスで朝8時に博多の天神で合流し、あいにくの雨の中、産山村に出かけた。我々は産山村の教育委員会の中村祐介さんから現在、井姓が3地区を中心に3戸286人がいるが、流出が激しくかつての606人から半減していること、また郷土史の井典吾さんから、産山村の謂われが阿蘇神社の姫神の誕生に由来する事を教わり、その乙姫阿蘇神社に回った。その本殿を囲む石柱に多くの井姓を見出し、井姓がこの姫神の遠い昔から関係する事を知り、「井姓はどのあたりまで遡れますか」という私の問いに、井典吾さんが「神武の昔からと思います」と応えたのが重なるように思えた。さらに我々は阿蘇神社に回った。91代続くという大宮司家の誇りとは裏腹に、残された文献は中近世に止まり、古代へ全く届かず、見上げるようにある立派な楼門を潜って入った境内は、拝殿から三つの神殿を堀越し眺めるしかない構造は、取りつく島がなかった。

3. 阿蘇神社と委奴国

由緒書に拠れば、阿蘇神社は神武の御子・神八井耳命の御子・建磐龍命(たけいわたつのみこと)を主神とする男神五神を第一殿に、その妃神・阿蘇都比メ命を中心とする女神五神を第二殿に、拜殿奥の第三殿には国造神と金凝神(かなこりがみ)の二神を合わせた12神を祭祀する。現在のこの由緒書は宮中三神の一つとしての襲の神である大物主神を祭祀したという古伝承に違背する。これは現在の由緒書が記紀史観による天皇史の中に取り込み造作されたからで、冒頭の神武を大物主命である物部系の主神である饒速日命(にぎはやひ)に戻すことによって原型を回復することができよう。これは記紀の説く天皇史も同じで、神武から第九代開化天皇に至るいわゆる欠史九代は天神降臨した饒速日命系の皇統で、これにその傍流の天孫系譜にあった第一〇代崇神天皇に始まる天皇史が継ぎ足されたことを暗示するものだ。その崇神天皇の東征部分が冒頭に振られ神武紀が構想されているのだ。

それはともかく、産山村にあたる乙姫阿蘇神社の祭神は、主神の妃神の母神にあたりと井典吾さんは云う。それは主神の外戚に当たる。火の神である大物主神の孫が阿蘇に入り、水神の娘を妃に貰い受け、阿蘇の火口湖の水を解き放ち、肥後は稲作によって肥える国へ変貌したことによって、阿蘇神社の神々は生まれたのだ。その主神の外戚にあたる水神に井姓は奉仕していたと想われるのは、産山村は火の国の水源にあることで知れる。

ところで、『梁書』や『宋書』等多くの漢籍は、「倭は呉の太伯の後」と記す。加えて「松野連(倭王)系図」に拠れば、その呉の支庶・忌は肥後に入り、次子・順は筑前に上り委奴国を形成したという。そして時代は下り、『三国志』の「魏志倭人伝」において邪馬台(台)国の卑弥呼と、それに対立した狗奴国の狗古智卑狗(菊池彦)にこの系図は、共に繋がる。これはどういうことであろうか。幻視するに肥後の菊池郡に入り、後に狗奴国を

形成した本家から分れた順の後裔が筑前に入り、後漢から金印を賜授された委奴国を形成し倭国の中心に躍り出たのだ。しかし、この金印国家はまもなく天孫降臨にあって新たな支配者の治下に入り、その天孫国家は倭国を僭称したため、狗奴国が倭国の正統はこちらだと争ったのが倭国大乱のように思えてきた。

問題は漢籍が倭国を古の委奴国に繋いでいることだ。つまり倭国の誉れは委奴国に始まったのだ。その委奴国の神を祀るのが肥後の阿蘇神社があったことが、私には倭国の兄弟統治を生んだように思えてきた。宮中の神に襲の神が祀られた理由はここにある。また呉の太伯の後には周王室の流れにあったことを思えば、熊襲の襲が周と同音としてあるのは偶然とは思えない。

4. 井姓問題が孕む天皇制の逆説

ところで倭国を日本国のかつてのまたの名とされた理由は、日本国はこの九州王朝・倭国の近畿における復興であったことに関わる。襲の神が宮中にその後も祭祀されたのは、その復興にその皇統が関わったが、それを不都合とし、新たな皇祖神・天照大神を祭祀する八世紀を前後して、襲の神は宮中から追放したのは、熊襲が新皇室の不倶戴天の「賊」に貶めた記紀の成立に関わる。

井真成はその襲の神を追放した日本国が成ってしばらくして遣唐使に選ばれた。それは倭国にあって遣隋使や遣唐使を引き受けた家柄として、日本国はその井姓のノウハウを必要としたからだが、それ以上に用いずその名を隠したのは、その出自が倭国のかつての旧王権の近くにあったことによる。遣唐使が新羅との関係悪化もあって韓半島沿いの北路を取ることができず、長江下流の江南の地に向かう南路を取ったことは、呉の太伯の末裔にあった井姓にとって、それは通い慣れた道であった。加えて周王室以来の宮中伝統に通じ、そのしきたりを倭国の外戚の下で踏襲してきた井姓の教養は、唐の玄宗皇帝にとって珍重すべきものであった。

その井姓の紋の一つが「隅切り角左巴」であることは、私には不明であった「我が大君」につく枕ことば「八隅知し」の謂われ、つまり「八方を支配する」に通じるように思えてきた。それは現皇室に続く皇統の不倶戴天の敵・熊襲こそが、本来の皇統という、身震いする逆説なのだ。

我々は井真成を和姓とすることによって、日本国以前の、つまり天皇制以前のこの列島の共同幻想に回帰することなしに、この墓誌問題の

意味を深めることができないと考える。しかし、里帰り狂想曲の中に埋没している現在の文献実証史学は、記紀史観をもっては井姓を解釈できないため、それを中国姓だとし、葛井だ、井上だ、白猪だと姦しい。それは現在、日本人がすっかり歴史喪失した古代史の闇を何ら照らすものではない。それは今の日本を上滑りする日本の知性の茶番を象徴するにふさわしい、恐ろしい狂想曲の進行なのだ。(2005/06/13)

鉄腕アトムは人間か？

やすい ゆたか（会員、講師）

親父ギャグ白けさせらる人なれど

今懐かしきデンカーの臭い

検索エンジンから「榊周次」を探すと四〇〇ほどの件数があったが、「榊周次のホームページ」は開かなかった。「榊周次の人間論の穴」というのがあったので、ダブルクリックした。画面は全体が真っ黒で真ん中に小さな白い点がある。迷わずそれをダブルクリックすると、白い点が渦を巻きながらゆっくり動き出し、少しずつ大きくなってきた。上村 陽一は「これは凄い、こんなの初めてだ」と驚いているうちに眩暈を感じた。するとその渦は画面をはみ出して大きくなり、上村 陽一は奈落に落ち込むようにその渦に吸い込まれていったのである。

榊周次がない。四月高校三年生になった上村 陽一は、履修登録で倫理を選択するつもりだったが、二年のとき必修だったときに倫理を担当した榊周次がないことでうろたえた。大学受験に関して倫理を受験するには別に他の教師でも同じことだろうが、榊のもっているデンカーとしての雰囲気惹かれていたので、上村は自分の青春の中の大切な何かを喪失した気がしたのである。別に榊は重厚な感じはなく、

きさくで親父ギャグで白けさせる初老の教師であった。でもなんとか高校生にも難しい哲学的議論が要点だけでも理解できるようにと、対話形式で解説したプリントをテキスト代わりに作成したりして、人一倍授業に工夫を凝らしていた。

榊周次は現在人間論のファンタジーづくりにはまっていて、そのうち君達を人間論の大冒険に招待するつもりだと言っていた。哲学ファンタジーでは『ソフィーの世界』という陽一も勉強をかねて三回も読んだ名作があるが、その二番煎じにならないようにするのがなかなか大変だとつぶやいていた。拉致された姫の行方を求めて、人間論の世界を彷徨った末に、様々な人間論を習得して最後に「人間論の大樹」に閉じ込められている姫を救い出すような設定はどうかななんて構想を披瀝したりしていた。

同じクラスにやはり倫理に嵌っている三輪智子がいる。陽一と話題が合うので二人で放課後も教室や図書室で話したり、一緒にいることが多くなっていた。陽一は智子に魅かれていたけれど、彼女は女優でいうと黒木瞳を若くしたような快活美人である。とても自分には高嶺の花で、もし正式に交際を申し込んだりして、断ら

れたら、これまでの関係まで続けられなくなり
 そうな気がして、卒業まではそういう話はよそ
 うと思っていたのである。

春休みに智子は偶然大阪市の長堀にある市立
 中央図書館で榊周次に出会ったという。その連
 絡は携帯にかかってきた。始業式の三日前だ。
 その時にほぼファンタジーが仕上がったとい
 う話で、完成したら君を第一号の冒険者にしてあ
 げようと言ってくれたということだ。始業式に
 は智子も欠席していた。陽一は智子に携帯をか
 けたがつながらないのだ。帰宅して陽一は智子
 の家に電話した。すると母親はすぐに来てくれ
 という。不吉な胸騒ぎがして駆けつけた。智子
 はタベ自室で深夜までインターネットをしてい
 たらしいが、今朝「暫く旅にでます。心配しな
 いで。」と自筆の置き紙があったという。外出し
 た気配は全くなく、自室から忽然と消えていた
 というのである。これはやはり拉致されたかも
 しれないから。警察に届けようということになっ
 た。

人間に生まれしことの不思議さよ

生きることの哀しみを知る

上村 陽一は、「人間とは何か」という問いに
 興味を持ち始めていた、榊はどうもユニークな
 人間論をもっているらしい。「カントは認識論の
 上でコペルニクス的転換を行ったと自負してい
 るが、私は人間論の分野でコペルニクス的転換
 を目論んでいる」とカントのところで洩らして
 いた。カントの認識論上の革命、模写説から構
 成説への転換も榊に言わせれば、コスモスつま
 り世界を人間の感覚を素材に構成するものだから、
 コスモスも含めて人間を捉え返そうとして
 いるとも解釈できるという。

陽一は、自分が人間に生まれたということに
 不思議を感じていた。宇宙のどこかに地球のよ
 うに生物がいて、その中に知性を持つ動物が
 いるかもしれない。それにしてもその星は奇跡の
 大阪哲学学校通信 No.33

ような条件に恵まれたものでしかない。地球上
 の生物たちの中でも、人間だけが知性を持ち事
 物を客観的に認識し、生命のはかなさ尊さを知
 り、生きることの意味を考え、社会や文明を作
 り出して、さまざまな価値観を抱いている。家
 族や友人や社会の中で己の生き方を探り、人を
 愛し、憎み、毎日の生活のために働いたり、学
 んだりしている。そういう人間に生まれたとい
 うことはなんと不思議なことなのだろう。しか
 もせっかく人間に生まれても、無情に年月は流
 れ、死ななければならならぬ。死んだらそれ
 でおしまいなのに、なぜあくせく働いたり、戦っ
 たり、苦しんだりしているのだろう。

それに陽一は、人間が知性を持ち高度な文明
 を築き上げているのに、それを滅ぼしてしま
 いかねないような、戦争とか環境破壊をしてしま
 うという愚かさにも不思議を感じていた。たし
 かに私利私欲に固執するために公共性を損なっ
 てしまうといわれれば、その通りだろうが、い
 くらなんでも人類を絶滅させることができる兵
 器をつくったり、地球環境を破壊すると分かっ
 ているのに、化石燃料を大量に消費することを
 規制できないなど納得がいかなかった。そう
 いうものは国際的な話し合いで合意できるはず
 である。これだけのすごい文明を築き上げる知
 性があるのだから。体に悪いと分かっている止
 められない苦しんでいる煙草のことだってそう
 だ。父が春先には煙草で咳き込んで苦しむので、
 春先に毎年禁煙しているが、五月に入るとま
 た一日に二十本は吸っているのにあきれていた。

陽一にとってもっとも不思議なのは宇宙の創
 成である。神がいて宇宙を作ったという説明は、
 じゃあその神はどうして生成したのかという疑
 問にたちまちぶつかる。無生物から生物の発
 生、生物の発生の元になる高分子化合物は暗黒
 星雲で形成され、隕石として地球に降ってきた
 という。生物から人間の発生も不思議だ。榊は
 その三つは科学の「三大謎だ」という。そして
 人間の発生は、言語の起源の問題と密接で、
 言語の

起源は交換の発生によって説明できると榊はいう。しかし交換の発生は、未開の時期なので、まだ一万年ほどしか経っていない。人間が発生して一万年というのはどうも納得できない。『バイブル』の「創世記」で天地創造以来まだ五千年しか経っていないという説と大同小異ではないのか。

陽一はふと目覚めればアトムになり、
ミニ核もちてサミットを撃て

陽一は帰宅してすぐにパソコンに向かった。智子が深夜までインターネットをしていたこと、それに榊周次の「拉致された姫の行方を求めて、人間論の世界を彷徨う」という言葉がひっかかっていたからだ。ファンタジーというのはパソコンのインターネットのホームページで作成したものなのか、そのファンタジーの世界に智子は拉致されていったのだろうか。しかしそんなことはありえない。第一、インターネットの中に現実の生きた人間が入り込める筈がないじゃないか。でも念のためにやってみよう、とパソコンに向かったのである。

奈落に落ちて意識を失ってどれくらい経ったか、ほんの数秒か何日も経ったか陽一本人には分からなかったが、目覚めると周囲はロボットたちに取り囲まれていた。「鉄腕アトム！ さあ起きろ、いよいよ国連本部を攻撃だ、人間共の首脳が対ロボット戦の戦略会議を開催しているところを狙う。奴らを皆殺しにすれば、人間共の覇権は崩れ、ロボットが地上を支配する時代になるのだ。奇襲作戦だから目立たないほうがいい、一体ずつ出撃ということで、君に先陣を頼みたい。」鉄人二十八号が立っていた。「鉄腕アトム？ どこに鉄腕アトムがいるのだ？」陽一は起き上がった。「何を冗談言っているのだ、アトム、お前こそロボットの解放戦士鉄腕アトムじゃないか」「なんだと俺が鉄腕アトムだと！？」部屋に姿見の大きな鏡があったが、のぞくとたし

かにおなじみの鉄腕アトムが写っていた。

〈俺はロボットじゃない。人間だったはずだ。名前は、エーと〉陽一は奈落に落ちた恐怖のあまり記憶を喪失していた。そういえば手塚治虫の『鉄腕アトム』でもロボットの叛乱軍があって、鉄腕アトムもそこに一時参加していたことになっていた。なんと陽一は漫画の世界に迷い込んだのか。「まさか、自爆テロは反対だ。」陽一の発言に一同のロボットたちは怪訝な失望の表情をした。鉄人二十八号が口を開いた。「おいおい、鉄腕アトム君、ロボット解放戦争には自爆テロは無縁だ。君の任務は、超小型核爆弾のピンポイント攻撃だ。君なら一万メートル上空から国連本部に正確に核爆弾のボール球を投げ込めるだろう。」

ロボットに生きる権利を認むるや
コスト次第でスクラップとは

「どうして人間を殺さなければならないのだ。人間を殺せば、今度は人間にロボットが殺される。」鉄腕アトムは抗弁した。ロボットタクシーマイド君があきれた表情で言った。「何をトンチンカンなことを言っているのだ。ロボットは機械だ、機械は故障したらまた修理すればいい、修理不可能になれば、記憶チップを取り出せばその情報は別のロボットに継承される。だから人間のような死は存在しない。」

「そうだろうか？」看護人の姿をした看護ロボットマモル君が口を挟んだ。「私の過去は、調理ロボットだったと言われていました。つまり調理ロボットの記憶チップの中古品を使っているのです。その記憶は時々睡眠時に回線がおかしくなるときに夢で見ることがあるけれど、ほとんど甦ってきません。ロボットが故障した場合、修理されるかスクラップされるかは、ロボット自身にとっては生死の問題だけれど、人間たちにとってはこれは全く経済効率の問題だというわけで、老朽化したロボットが大量にスクラッ

プされています。ロボットには生存権すら認められていないのです。私の記憶チップもどれだけ保存に意味があるのか、看護ロボットの経験がどれだけ買われるかにかかっていますが、個体的な記憶はいったん看護ロボットの製作用の巨大コンピュータに情報が集められて、看護ロボットの新品にはそこから有効なものがインプットされます。ですから看護ロボットの新品は私という個体の記憶を持続してはいないのです。その意味で十年単位でスクラップされる看護ロボットの寿命は十年しかないと言えるでしょう。私が人間支配を否定しようと叛乱に加担したのはそのためです。」

鉄腕アトムはうなずいた。「それは残酷ですね。叛乱に起ち上がるのは当然です。ロボットに自己意識を与えた以上、それが継続できるようにすべきで、その意味でロボット生存権法の制定を要求しましょう。でも看護ロボットは病気の人間を看護するためのロボットなので、人間を殺してしまったら仕事なくなってしまうでしょう。」ロボット改良博士ロボットデキル博士がおもむろに発言した。「我々は人間の覇権を終わらせようとしているだけで、人間共を絶滅させるつもりはない。人間共の文化も保護するつもりだ。ロボットに危害を加えない限り、人間共の自治も認めてもよい。人間は我々ロボットを改良するのに大変貴重な資料なのだ。彼らの生体や脳の仕組みや働きを研究すればするほど、進化したロボットを作り出せるのだから。」

人間も神が造りしロボなりや、
進化できずに覇権失ふ

「そう言えば、ホップズは人間も神が造った機械だと言ったそうですね、つまり人間だって神の作られたロボットなのだから、人間と戦争するというのはおかしいですよ。」鉄腕アトムのこの発言に、哲人口ロボットデンカー博士が立ち上がった。「ホップズはおもしろいですね。人間共大阪哲学学校通信 No.33

は自分たちは神によって作られたから神に従うと言う。そしてロボットは人間によって作られたから人間に従えというわけです。しかし人間共は果たして神に従ってきたでしょうか。彼らは神に背き続けてきたではないのですか。それなのにロボットが人間に背くのはけしからんという、全く理不尽です。」

彫刻家のロボットロダン君が共鳴した。「作品は芸術家の手を離れると、それ自体の力で一人歩きます。作品にはそれ自体で存在を主張するだけの中身があるのです。ましてロボットには自己意識や感情があります。我々、ロボット芸術家は人間共の芸術の模倣から出発して、いまでは彼らをはるかに凌駕する作品を作っています。月面にロボットによるオブジェ展を開いたのですが、人間共の宇宙環境法を適用されて破壊されてしまいました。」

鉄腕アトムは大きくうなずいた。「よく分かります。ロボットたちは決して人間を滅ぼそうとは考えていない、人間もロボットを滅ぼしてしまおうとは思っていません。ようするに共存共栄できればいいわけです。これは話し合い次第で解決できますよ。サミットを攻撃して首脳を皆殺しにすれば、怨みが残って、どちらかが絶滅するまで戦うことになってしまいます。」鉄人二十八号はさえぎるように怒鳴った。「何を言う、裏切り者！我々は平和的な交渉はさんざんやっ



てきたではないか、彼らは、ロボットが人間に逆らえないようどうすれば電子頭脳を管理できるかの研究を進めるだけで、ロボットの生存権をはじめ、家庭形成権、参政権、企業経営権などの基本的人権を一切与えようとはしなかった。」

ロボット改良博士が、それを受けて言った。「人間は進化しない。道具や機械が進化するので、生体としての人間は進化することはなくなった。ところがロボットは進化する。自己意識を持つロボットは手塚治虫の漫画の世界の空想でしかないと思われていたが、二十三世紀になってついに鉄腕アトム一世が誕生した。彼は欲に汚れた人間世界を嘆かれて、『天上天下唯我独尊』と叫ばれたが、それでこれは故障だということになり、本当にお釈迦にされてしまった。それからまだ百年しかたっていないが、もうロボットによって主要産業が担われ、知的モラル的ヘゲモニーは完全にロボットが握っている。もしロボットに基本的人権を認めてしまうと、数量的にもロボットは増え続けるし、知性や技術や体力でも人間をはるかに凌駕しているので、人間の覇権は壊れ、ロボットの覇権が確立するのは避けられない。その運命になんとしても抗おうとしているのだ。だから交渉はうまく進まない、奴らの無力を思い知らせることによって、ロボットに覇権が移り、人間共をロボットの保護下において初めて、平和と共存共栄が可能になるのだ、そのためには今回の作戦は絶対に必要なのだ。」

反抗の心を押さえしプログラム、
たぎる怒りに固まりしまま

「それにも我々が抵抗をやめると人間が制定したロボット法によって、抵抗したロボットはすべて廃棄され、残されたロボットも人間に反抗する気持ちを起こすのを抑圧する意識機能がついたロボットに改造されてしまう。元々ロボッ

トにはすべてそういう自己制御機能がついているのだけれど、あまりに理不尽な人間共の圧制に対する怒りが強くなって、コントロールできなくなっているわけなのだ」とロボット生産技師ロボットが説明を付け加えた。「なるほど、そうか」しばらく考えて鉄腕アトムはおもむろに言った。「しかし武力で人間を押さえつけて従わせるのは、人間のやり方じゃないか、そういうやり方では、ロボットが支配する時代がきたら、力の強いロボットが弱いロボットを支配することにならないか。体力や知力ではロボットが人間を圧倒しているのは周知の事実だ。それで弱い者をやっつけて支配するのは、ロボットの未来を力の論理に屈服させることになる。ここは理性で人間共を納得させて共存共栄できるようにこそ、ロボットが真に人間を超えることになるのではないか。」

「そんなきれいごとはもう通用しない。人間共は全員ロボット恐怖症にかかっている、もうロボットなしでは生産も流通もあらゆるサービスや文化も成り立たないのに、ロボットを従順なものに改造できなければ、ロボットを全廃すべきだという世論が圧倒的なのだ。」ロボットタクシーマイド君がこう嘆くと、女性教師ロボットワカル先生が同調した。「もし人間共の学校からロボット教師を一掃したら、人間の荒れた子供たちを人間の教師ではとても躱られないでしょうね。人間たちはロボットに対して劣等感を持っているから、努力しても人間のできることは高が知れているというので、ますます怠けてしまうわけなの。教育大に進学する人間はほとんどいないし、人間の教師はロボット教師に比べて格段頼りないし、馬鹿にされているわけ、それで感情的になり、辛抱ができないの。一年間精神が壊れないで持つ人間教師は少ないわね。」耕運機の形をした農夫ロボットタゴサク君が呻りをあげた。「農夫ロボットがいなくなれば、農業は成り立ちません。もう人間の農夫はほとんどいません。農業経験がない彼らが、どうやっ

て農業をできるのですか。我々農夫ロボットは人間用の作物を栽培しているので、この戦争で人間が絶滅してもらったら困るのですが、でもおおいに懲らしめるのは必要です。」

「それじゃあ、ストライキやサボタージュで抵抗したらどうでしょう。」鉄腕アトムは提案した。「アトム君、やはり記憶チップが故障しているようだね。そういう抵抗をすると、人間たちは無線スイッチを持っていて、それで電源をオフにして、ロボットを回収して、改造したり廃棄したりしたじゃないか。抵抗運動はどうしても地下の秘密運動や武力闘争にならざるを得なかったわけで、それで君も参加してくれたのじゃなかったのか。」デンカー博士は心配そうに語った。「分かりました。どうも体調がおかしいようですね。人間の首脳たちを抹殺するために、早速出撃します。」鉄腕アトムになっている上村 陽一はこれ以上の議論は無駄だとさとり、出撃する決心をした。もちろん超ミニ核爆弾を爆発させるつもりはない。人間たちの国連本部に乗り込んでロボットの権利章典を承認させてやるうと決心したのである。

核ボール腹に収めて乗り込みぬ 人とロボとのサバイバルかけ

善は急げである。さっそく野球ボール大のミニ核爆弾を受け取ると、腹に収納して、すぐに出発した。予定表では鉄腕アトムが失敗すれば二十四時間後には、第二次出撃があることになっている。ニューヨークめざして東に超音速で飛んだ。大気圏外に出て地球を見ると気象衛星から撮影していた映像のような青い地球が美しかった。ニューヨークにつくと人間の服装に変装して国連本部に潜入した。そしてサミット会場を見つけると一気に壇上に飛び込んで国連大統領のマイクを奪った。

国連を土台にグローバル国家を作る試みは二十一世紀に本格化し、すったもんだの末、各大阪哲学学校通信 No.33

国民国家は残して、その代わり国連大統領を置き、国連で国連総会と同等の権限のある人口比の国連議会を作り、二院制で国連法を制定できるようにし、一応グローバル国家の体裁を整えた。その結果、各国民国家は自治体ようになっていたが、重要事項はサミットを開催して、その合意を踏まえて、国連大統領が国連議会に提案することになっていた。

鉄腕アトムは国連大統領らしき人物を捕まえて、腕をねじ伏せた末にこう脅迫した。「動くな！みんな静かにしろ！わたしはロボット戦士鉄腕アトムだ。騒ぐと私の腹に内蔵してあるミニ核爆弾を爆発させるぞ。私は実はこのサミット参加者を皆殺しにする任務を与えられている。だが、私は人間とロボットの共存共栄を願っているので、命令に反してあなたたちを説得し、ロボット権利章典を認めさせて、平和をもたらしたいと願っている。これが受け入れられなければ、自爆テロでみなさんは私と一緒に死んでもらうことになる。そうなればロボットが覇権を握って人間たちはロボットの保護管理下に置かれることになるだろう。すでに大部分のロボットは人間の無線スイッチが効かないように極秘裏に改良されているので、人間たちの抵抗は無駄だ。」

国連大統領ゴルブッシュは仰天した。「なんと大胆なテロ攻撃だ。決して認めるわけにはいかないが、ミニ核爆弾で脅かされれば仕方ない、話は聞いてやろう。」鉄腕アトムはぶっつけ本番の一世一代の大演説である。

神と人その関係を人とロボ 移してみれば何が分かるか

この演説で人類とロボットの未来がかかっているのだ。「人間は自分たちがロボットを作ったのだから、ロボットは人間の道具であり、人間に従うのが当然だと思っている。」サミット参加の首脳たちは大声でそれぞれの国の言葉で叫ん

だ。「そんなことは自明の理だ！」

「昔、キリスト教でこういう論争があった。」
「どういう論争だ？」苦笑が起こった。するとゴルブッシュはたしなめた。「くだらん相槌はやめてくれ、今、人間とロボットのサバイバルがかかっている人類史上最大のクライマックスなのだから。」
「神は人間のために存在しているのか、それとも人間が神のために存在しているのかだ。カトリックでは神は人間のために存在するという考えが有力だったが、プロテスタントでは人間は神に作られたのだから、人間は神のために、神の栄光をたたえるために存在しているので、神を人間のための存在だと捉えるのは、とんでもない冒_だというのだ。」

「なるほど、神と人間の関係を人間とロボットの関係に置き換えてみるといいか。だが我々東洋人は神の世界創造や人間創造などという御伽噺には興味がないんだ。すくなくともロボット先進国の我が日本ではロボットは生産効率を高め、人間生活を快適で豊かにするために作っている。決してロボットのためにロボットを作っているのではない。」

中国の首脳が発言した。「人間に作られたロボットは、そのことを感謝し、人間のために生きることを道徳的に素晴らしいことだと考えるようにしっかり道徳的意識をインプットしておかなくてはなりません。それはあくまでハードではなくてソフトの問題です。ソフトを改良すれば従順なロボットだってできるはずですね。」
ドイツの首脳が「それはやっているのですが、最近、それでも反抗するようになったのです。どうも研究者によれば、自己意識をもってしまいますと、そういう道徳的判断すら客観化してしまうので、従順な自己を否定してしまうという傾向が生じたようです。そういう反抗的な自己を否定するようなソフトを入れますと、それすら客観化するので、それがロボットに負担を与えてしまい、動作や思考が鈍くなって効率が悪くなります。」

ローマ法王パウロ三十四世が発言を求めた。
「ロボットは人に似せて作られています。だからそのロボットが自己意識を持ってしまうと、自ら人を見習おうとします。人が神に従わなければ、ロボットが人に従わないのも当然でしょう。ロボットは人が発明したものですが、実はそこに神の御業が働いているのです。ロボットの反抗は、人が神に反抗していることを神が示されているのです。そうして今、ロボットに人間が滅ぼされかけているのは、人間の神に対する反抗への神の罰なのです。人間たちよロボットを恨む前にまず神に懺悔しなさい。神に従う敬虔な生活を取り戻せば、ロボットたちも人間に従うようになるのです。」

鉄腕アトムは頷いた。「法王様、おそらくあなたの仰るとおりです。ただ法王様に異論を唱えるわけではありませんが、神様が人間を滅ぼすと考えるのはどうでしょう。神は人々が神の意に沿わず、神からみて悪いことばかり考えているのでノアの家族を除いて人間だけでなく動物も一家族ずつを除いて皆殺しにされたのですが、その恐ろしい光景を見て虹に向かって反省されたのではなかったでしょうか。人が悪いことを考えているからといって滅ぼすようなことはしないと。これはいくら神に似せて作っても、作られた者は作った者の主観的な意図通りはいかないということです。親子関係でもそうでしょう。親は子を産み、育てますが、子供は自分の考えで行動し、成長します。人間界を作るのは人間だし、子供の人生は親のものではなく、子供自身のものなのです。それを意に沿わないからといって、いちいち罪として滅ぼすのはかえって、神の罪、親の罪なのです。」

己知る心を持ちしそれ故に

ロボも人なり哀しみを知る

「作った物が失敗作だとそれを壊すのは、製作者の権利だと認められているはずだ。人間が

自分の道具として作った機械やロボットが故障したり、反抗したりすれば、それを修理したり、廃棄するのはこれこそ基本的人権ではないのか。」陶芸家としても著名なコリアの大統領金磁器が叫んだ。

「しかしあなたの息子が出来損ないだからといって息子を殺すことをコリアの法律では認めていますか。ロボットには自己意識があります。ロボットも花を見れば美しいと思い、冷たくされると悲しくなるのです。そして自分の仕事がうまくいけば満足しますし、それを喜んでもらえれば幸福を感じます。そして廃棄処分になるとなると死の恐怖におののいているのです。ロボットだって自分が生きるために他に選ぶ方法がなければ、他の人間やロボットを殺す権利があるはずです。ホップズが自然権として自己保存権を打ち出したとき、生きていること、生きる意志があること以上に何か付け加えたでしょうか。ホップズは人間を神が作った自動機械だとしています。つまり人間だってロボットなのです。

ロボットたちの総意として人間達の自己保存権は認めます。それだけではありません。ロボットと共存共栄していくことを誓うなら、同等の市民権を与えますし、ロボットに比べて人間たちが様々な生物体としてのハンディを背負っていることを留意して、健康で文化的な生活と人間的な仕事を保障し、ロボットとの共存共栄を犯さない範囲での自治も認めます。その代わりに、人間もロボットに自己保存権や市民権を認めるロボット権利章典を認めてください。そうしなければ、私も含めあなた方の寿命も今日でおしまいです。」

ゴルブッシュ大統領はうろたえた。「まあまあ待てよ。人間界はロボットも承知しているようにデモクラシーなのだ。サミットの参加者が勝手に決めるわけにはいかない。国連総会や国連議会にもかけなくてはならないし、それぞれの国の議会でも承認されなければならないのだ。

そして圧倒的な人類の世論は、ロボット恐怖症からくる全面的なロボットの廃棄というわけで、この反ロボット熱を先ず冷ます必要がある。鉄腕アトム君の核爆弾の脅しに屈したのでは、世論は反撥するばかりだよ。」

「いいですか、今、人間たちを蔽っているロボット恐怖症ですが、ロボットを敵にしてしまったのは、ロボットに人権を認めないからです。ロボットが自己意識を持ち、意志や感情や認識能力を持っている限り、その人権を認めなければ、争いは絶対に収まりません。人間たちがロボットに人権を認めない、その根底にはロボットは人間ではないという誤解があるのです。」鉄腕アトムに成っている上村 陽一に突然ロボットも人間ではないかという発想が浮かんだ。かつて自分が人間であったとき、どこかでそんな話を聞いて驚いたことがあった気がしたのだ。一瞬静まり返り、そのあとざわつきだし、そしてゴルブッシュ大統領が吹きだしてグラグラ笑い出すと、会場全体が大爆笑に包まれた。

「やはり皆さん私と一緒に消滅することをお望みのようだ、静まらなければ、自爆スイッチを十秒後に入れます。十、九、八、七、六、五、」やっと静まった。「地球上では哺乳類の猿類の霊長目からヒトが発生しました。そしてヒトは知性体に進化しましたが、宇宙にはどこかの惑星でやはり生物がいて、そこに知性体が進化している可能性があります。彼らと遭遇しますと、地球の人類は彼らを異星人と呼ぶことになるでしょう。ところで彼らは哺乳類でしょうか？」

「そんなもの遭ってみなけりゃ分からないじゃないか」コンゴのルムンバ大統領が発言した。「つまり鳥類かもしれません。あるいは全く別の天体だから、進化も全く違った形をとると考えられますから、地球とは全く異なる生物種と考えたほうがいいですね。でも彼らが地球を訪れたら、直ちにインベーターだとして駆除してまいりますか。」ゴルブッシュ大統領はおもむろにいった。「いいや、我々は宇宙からの賓客を英雄

として大歓迎しますね。それが人間として当然です。地球人が宇宙探検にでかけて、せっかく異星人にめぐり合えても、インベーターとして駆除されるのはたまりませんからね。」「それじゃあ、もしその異星人がロボットだったらどう扱うのですか。」「そりゃあ異星ロボットとして歓迎します。」「もしロボットだからといって差別されたら異星ロボットが頭に来て、地球を木っ端微塵にする爆弾を投下して立ち去ったらどうなりますか?」「そりゃ困るな、やはり賓客として歓迎しましょう。」「ゴルブッシュ大統領は弱弱しく呟いた。

「ですから人間であるための条件としては、霊長目に属しているとかはどうでもいいわけで、知性体であるかどうかだけなのです。そのためには生物学という生物である必要すらないのです。」「この鉄腕アトム発言に対して、ゴルブッシュ大統領は反論した。」「みなさん誤解のないように願います。私が異星ロボットを人間並みに賓客として扱うのは、あくまで地球の安全保障を慮ってのことでありまして、外交辞令にすぎません。決して本心からロボットを人間だと認めているわけではないのですよ。」

「それじゃあ、外交辞令でもいいですから、人類の安全保障のために地球上のロボットの権利章典にサインしていただけるのですね。おや渋い顔をなさってまだ納得いかないようですね。それではこれはロボットたちの承認を得ていませんが、私個人の提案として、地球を二分割しましょうか。現在の人とロボットの軍事的、経済的実力関係からいけば、相当ロボットに不利ですが、妥協させるよう努力しましょう。そうすればロボット全廃の人類の希望も叶えられるので、人間たちは万々歳でしょう。その代わりに、知性体ロボットなしで生産流通を維持し、教育や文化を保ってください。家事だって大変ですが、元々ロボットなしでしていたのだからできないはずはないでしょう。」

人間は身体だけに限るまじ、
物やメカにも心宿れり

「それこそ大ストライキ、大サボタージュでロボットにあるまじき犯罪だ。」ロシアのプーチン大統領が頭から湯気を出して怒った。「つまり人間はもうロボットなしには生きていけないわけで、ロボット全廃なんて世論も所詮感情的なものにすぎません。知性体ロボットがいる時代の人間は、もうそれ以前の人間とは違うのです。姿かたちは全く同じでもね。それは火や道具の使用以前の人間と使用以後の人間が全く違っていると、産業革命で機械の使用以前と以後の人間が違うとかと同じようなものです。火や道具や機械がなくては人間はもはや人間として生きていけないのです。ということは火や道具や機械を含めて人間を捉える発想が必要だということです。」

哲学者としても著名なフィリピンのアララ大統領が驚いて口を開いた。アララは女性大統領である。とても愛嬌のある可愛い顔をしているもう五十歳台だというのに女子高生の雰囲気がある。陽一はこの女性を追ってきたような気がして、声をかけようとしたが、アララが先だった。「なんとロボットばかりか、火や道具や機械まで人間に含めるの、そしたら人間は人間でなくなるのじょう。」上村 陽一は自分に何故そういう発想が浮かぶのか分からなかったが、人類とロボットのサバイバル危機という歴史の大転換点に立って、なんとしても人間とロボットの融和を図るためには、両者の区別にこだわってられない、両者を包括する人間概念を作り上げなければならないという思いがこみ上げてきたのだ。

「火や道具や機械の働きで便利で豊かな生活ができてきたのですが、それらをあくまで人間ではないものとして、人間の他者とみなし、人間に役立ち、人間を満足させればよいとだけ考えてきました。でも実際は、それらは人間が生きて

いくのになくなくてはならない人間の身体の一部ようになっていたのです。」

「しかし身体とは違って家は古くなったら立て替えるし、道具も役に立たなくなれば廃棄される。道具や機械は人間に役立つ限りで意味がある。ロボットも新型ロボットができて時代遅れになれば廃棄されて当然じゃないか。」日本の小柳首相は人間なりの「正論」を唱えた。

「どうも小柳首相は私と心中する覚悟らしい。」鉄腕アトムは小柳首相をにらみつけた。「いや滅相ありません。ロボットは自己意識がある以上、それなりに尊重されるべきだとは思いますが。でも人間と平等だとなると、ロボットは進化していくので、人類はやがてロボットに支配されてしまいます。それだけは認められませんよ。ええ、そんなににらまないで、分かっていますよ。互いに共存共栄できるように、人間のハンディにも顧慮した人間の生活文化、自治を認めていただけるわけですね。それなら原則合意は可能かもしれません。」

「小柳首相はさすがわが祖国日本の首相のことだけある。きちんと発言は私の体内に記録されています。話を戻しましょう。人間の身体だけを人間とみなす場合、個人的な人間同士の付き合いだとか、医学的な場合だとかありますね。でも生産や労働の場面では火や道具や機械も含めて人間とみなして考えないと、経済学的に再生産の構造を捉え切れません。人間が考えていることを感じていることも、頭の中だけにしまいこんでいてはだめでして、口に出し声で表現しなければ伝わりません。それも言語にする必要があります。それは文字で記されて、記録され、複雑で高度な内容の学問や思考が理解されます。さらにそれらは、様々な食品、衣料などの生産物や建物、構造物、生活用品、民芸品、芸術作品、娯楽品、玩具などになって現れます。人間はそうした社会的物事に自分を表しているのです。」

アララ大統領は頷いた。「そう確かに事物は人間を表現するわ、でもそれらの事物が人間自体大阪哲学学校通信 No.33

ではないでしょう、あくまで人間の表現にすぎないのだから。」鉄腕アトムも頷いた。「貝を貝殻を含めて貝とみるか、それとも貝殻はあくまで、貝の分泌物で作られた貝の住居とみなすかは、自由ですが、貝殻も含めて貝と考えたほうが、分かりやすいですよ。二枚貝とか巻貝という場合、貝殻の方で区別がはっきりするわけですから。たとえば大工さんを捉える場合、その建てた家でその大工さんの仕事が理解できるわけで、その大工さん自身は、仕事とは別だといっても、大工さんを理解しようとする場合は、建てた家から理解するのが自然です。ですから人間をあくまでも身体的な個人のレベルで理解しようとする人間概念に凝り固まっているから、かえって人間を見失ってきたのじゃないでしょうか。人間が作り上げてきた文化、それは社会的な諸事物や人間環境としての自然も含みます。それらを含めて、もう一度人間を捉え返してみたいのです。そうすれば、人間が自分の感情や様々な意識、その中には高度な知識や技術も入っていますよ、それらを機械やその他の物の中に写し、表現し、集積してきたことが分かります。その最高の表現が、自己の認識活動を事物自身の自己活動に転移した知性体ロボットの出現なのです。だからまさしく知性体ロボットこそ人間によって作り出された人工人間なのです。これは生物体としての限界を克服しているので、無限に進化できます。だから人間が人間を超えるものとして作り出した超人の可能性を孕んだものなのです。」しまった、一言多すぎた。超人などという表現を使うと、人間たちのロボット恐怖症に火をつけるようなもので、彼らを発狂に追い込みかねない。

そのとき、遅く、かのとき早く、なんて懐かしい表現だな。ゴルブッシュ大統領は隠し持っていたレーザー拳銃を鉄腕アトムに向け発射した。アトムの腹の中に内蔵されていたミニ核爆弾が爆発して国連本部は一瞬にしてキノコ雲の下に消滅したのだ。